

土木工学・建築学委員会都市・地域デザインの多様なアプローチ分科会  
第25期・第12回 議事要旨

日時：令和4年10月28日（金）15：00～17：00

会場：遠隔会議

出席者：佐々木 葉・伊藤 香織・小野 悠・神吉 紀世子・齋尾 直子・坂井 文・田井  
明・竹内 徹・船水 尚行・古谷 誠章・南 一誠・三輪 律江・村上 暁信・

参考人：田中 一雄（GK デザイングループ・代表取締役社長/CEO）

議題および決定事項

1) 田中氏に「デザインの本質と世界デザインの潮流－「デザイン価値」の理解のために」というテーマで、主としてインダストリアルデザインの観点から話題提供いただいた。「創造性をもって社会全体の『より良い明日』を拓く行為」としてのデザインの定義に始まり、世界のデザイン潮流、今日のデザイン、土木・環境領域へ、とお話しいただいた。

○世界のデザイン潮流：社会主義をベースとする欧州型デザイン、商業主義のアメリカ型デザイン、日本民芸運動の延長上にある大衆芸術としてのデザインが源流としてあり、それらが社会価値・環境価値を追求するデザイン、ビジネスのためのデザイン、モノからコトへという現代のデザイン潮流につながっている。イギリス、インド、シンガポール、台湾、中国などでは国家発展のエンジンとして国策としてデザイン振興が推進されている。

○今日のデザイン：デザイン思考、デザイン経営などデザインの領域が拡大している。デザインの概念は20世紀型の狭義のd-デザインと、21世紀型の広義のD-デザインで整理できるが、日本ではd-デザインの認識が根強い。

○土木・環境領域へ：デザイン＝装飾＝無駄という概念からの脱却が必要であり、「美」の「質と意味」の言語化や視覚化が求められている。また、例えば、「美しい景観の街に住んでいる人は幸せに暮らし、街は発展する」ことを定量的に評価するなど、建築・土木領域における造形デザイン（d・狭義）価値の明確化が必要。

その後、出席委員と議論し、以下のような意見が挙げられた。

委員：京都では「若者が流出しているのは景観のために高さ規制しているからだ」といった報道がされるなど、原因は複合的であるにもかかわらず、デザインが悪者にされ、景観価値は経済価値をもたらさないといったようなことが言われている。

田中氏：デザインや美は分かりづらいので悪者にされやすいということがある。

委員：私たちがデザインするものは土地の上に立つので、地域性をどのように入れていくのが重要。

委員：今日のような話を大学などで講義してもらってデザインについて学んでほしい。学ぶ機会がないので行政が知らないのも無理はない。

委員：構造デザインは自然の声を聞いて処理する。

田中氏：造形デザインとエンジニアリングデザインを同時的に行うことで、どちらかだけではできないユニークなものができる。

田中氏：コンペなどで、高い点数をとったものが結果的に良いものとは限らない。理屈だけでは良いものは選ばれない。

委員：審査・評価は点数だけで決まらない。最後に総合的に考える必要がある。

委員：造形デザインが蔑ろにされているのは問題。分身ロボットもソフトだけでなくロボットの造形デザインが重要。護岸についても景観だけでなく生態系の視点など、価値の拡大も重要ではないか。カネと時間がかかる、すぐに回収できないという理由で適切な投資がなされない。

田中氏：d-デザインをどう評価するかという問題。デザインは社会実装力であり、市民に愛されて使われていくためにはデザインが必要。デザインの価値の広がり、美観上だけでなく数字上で、客観的に評価できる指標をいかに作っていくかが課題。

委員：横浜のベーシックファニチャーは行政が上からコントロールしているが、民主的に実現していく方法はないか？

田中氏：景観やデザインの共通感覚を作っていくには、ある程度ガイドラインは必要。

委員：行政にデザインの重要性を知ってもらうこと、理解してもらうことが大事。行政担当官のデザイン教育の義務化など。行政に伝えていくことが大事だということが改めて分かった。

2) その他

なし